

「失われ」に対する反発

三谷 竜彦

はじめに

我々はしばしば、失われようとするものに対して、あるいはすでに失われてしまったものに対して、それを失いたくないという思いや、あるいはそれを失ってしまった悲しみの念を抱く。そうした気持ちの対象は、動植物等の自然物であることもあれば、人間（および人間が作ったもの）であることもある。またそうした気持ちの対象は、その現実存在に限られはせず、その本質であることもある。（本稿では「本質」という語を極めて（一般的な定義からすれば、もしかしたら不当に）広い意味で用いる。つまり、そのものをそのものとしてアイデンティファイするもの一般、可変的ですがある独自の性質や特徴という意味で用いる。）例えば次のような例を考えてみよう。我々は動物園でライオンを見るとき、そこに何か失われてしまっていると感じ、しばしば悲しみの念を抱く。この気持ちの対象は、もちろんライオンの現実存在ではない。ライオンは現実にもそこに存在している。そうではなく、我々が抱く悲しみの対象は、ライオンの本質なのである。知識の乏しい子供であれば話は別だが、ライオンが本来どのような生き方をしているのかを知っている者であれば、ライオンが動物園の一角の狭いスペースで、獲物を追うこともなく、そもそも走ることもほとんど全くなし、闘うこともなく、飢えることもなく…といった仕方で見ているのを見て、そこにライオン本来の本質的なあり方（少なくともその多く）が失われてしまっているのを感じ取るであろう。極論すれば、動物園にいるライオンはライオンではない。動物園のライオンは、ライオンをライオンとして特徴づける本質的なアイデンティティ（少なくともその多く）を、すでに失ってしまった（より適切な言い方をすれば、奪い取られてしまっている）のである。我々が抱く悲しみの念は、すでに失われてしまった（だがもちろん取

り戻し不可能というわけではない) そのライオンの本質に向けられているのである。

本稿は、「失われ」に対する反発の気持ちを糸口にして考察を行う。その考察の対象は、自然物ではなく人間、しかもその現実存在ではなく本質である。つまり人間の本質に関して、我々がその「失われ」に対して反発するものを、考察の対象とする。ところで人間と一口にいても、それは差し当たり次の三つの次元に分けられる。1. 個人的人間(個)、2. 人間集団(特殊)、3. 人間一般(普遍)。我々は、これら三つの次元における人間の本質がもし失われようとするなら、あるいはすでに失われてしまっているなら、多くの場合反発の気持ちを抱くであろう。ではその反発の気持ちは何に基づいているのであろうか。そしてその反発の気持ちはどれほど重みがあって、したがって重視されるべきものであるのか。これらの問いに答えること、そしてさらにそれに基づいて、適切と思われる提言を試みることが、本稿の考察の課題である。では以下において、三つの次元それぞれに即して、考察を進めて行くことにしよう。

1. 個人的人間(個)

自分らしさと一般に呼ばれるものを、我々は持っているであろう。それはときに自分の殻というネガティブな意味合いを持ち、場合によっては無理してでもそれを破らなければならないこともあり、またそのことによって新たな自分らしさを発見することもあるだろう。だが、いずれにせよ誰もが最終的には自分らしさを捨てることはできず、そこへと帰着して行くのではないだろうか。少なくとも、自分が自分でなくなってしまうと思われるほどに自分の殻を破ることに、人は耐えられないのではないだろうか。「自分らしさを大切に」とか、「いつでも自分らしく」ということは、それなりの重みを持つのではないかとと思われる。

もちろんその際、自分らしさという個人的な次元での本質的アイデンティティを、必ずしも不変的なものとして捉える必要はない。そうした個人的アイデンティティは、必ず遺伝と環境という二つの要因によって形成されるものであり、したがって環境次第で大きく変化しうるものである。だが遺伝的要因が占

めるウェイトは少なくとも無視できるようなものではなく——一般的にはだいたい50%程度といわれている——、また人格形成がおおよそ完了してしまった後には、個人的アイデンティティはほとんど変化しないものである。こうしたことを考慮すると、少なくとも成人の個人的アイデンティティは相当に確固たるものとして成立していると考えるのが妥当であろう。したがって例えば、近年盛んになってきている、個人的アイデンティティに関する構築主義は、遺伝的要因を無視ないしは軽視している点で、問題があるのではないと思われる¹。

それではこうした個人的な本質的アイデンティティの「失われ」に対する反発は、いったい何に基づいているのであろうか。おそらく全くもって情緒的なものに基づいているであろうと思われる。したがってそれに基づいて生じる反発は、それほど大した根拠がないといえるであろう。したがって、例えば構築主義的な考え方をする人がそうだと思われるが、自分自身の個人的アイデンティティが失われることに対して、何の反発も覚えない人もいるであろう。また、そもそも個人的アイデンティティに関する問題は、各個人がどのように生きるかという、各個人の生き方の問題である。したがって少なくとも民主主義が尊重される限りにおいては、それが失われることに対して反発する人は、それを可能な限り大切にしていけばよいであろうし、一方そうした反発を抱かない人は、自分自身を自由に（しかしやはり周囲の人の意見も考慮に入れた上で）改変して行けばよいであろう²——その際もちろん、自分自身の改変が自分自身に対して、ましてや他者に対して何らかの危害を及ぼす恐れがある場合には（例えば何らかの薬物の使用におけるように）、やはり規制がなされるべきであるが——。つまりこの問題に関しては、取り立てて提言すべきことはないといつてよいと思われる。

¹ 個人的アイデンティティに関する構築主義については、もちろん多くの文献があるが、例えば次のものを参照せよ。片桐雅隆『プライバシーの社会学 相互行為・自己・プライバシー』、世界思想社、1996年；土井隆義『「個性」を煽られる子どもたち 親密圏の変容を考える』、岩波書店、2004年。

² 極端な例を挙げていえば、次のようにいってよいであろう。すなわち、仮に遺伝子や脳に至るまで自分自身を自由に改変することが技術的に可能になった場合に、それを（あくまで自分自身に対して）なすかなさないかを決定するのは、各人の判断に委ねられてよいであろう——ただしもちろん生殖細胞の遺伝子の改変は子孫に影響を及ぼすので、各人の判断に委ねられるべきではないが——。

2. 人間集団（特殊）

オリエンタリズム批判以降、「遅れて来た旅人」（レヴィ＝ストロース）の抱く嘆き、つまり失われ行く土着的民族文化に対する愛惜の念が、抑圧的他者表象（強者が弱者に対して抱く勝手なイメージを、その弱者の本質として、その弱者に押しつけること）の現れとして、概ね批判の対象となってきた。確かに強者が弱者に対して勝手に抱いたイメージを、その弱者の本質としてしまうことは間違いであろう。では弱者自身が自らの民族文化を自ら表象し、それを自らの本質としてしまうことは正しいのであろうか。この問いに対しては、基本的には「否」と答えざるをえない。なぜなら、そもそも民族という枠で人間集団を区切り、そのようにして区切られた民族を、他に対しては異質的で、内に対しては同質的な、そういう確固とした本質を持ったものとして捉えること自体が、虚構的だと考えられるからである。そもそも人間集団は重層的に重なり合っており、ある集団を他の集団から画然と本質的に区別するような、そういう境界線を引くことはできないであろう。したがってそもそも本質的な民族文化というものの自体が、虚構的であるといつてよいであろう。

だが、それでもやはり何らかの緩やかなまとまりを持った人間集団というものの（他に対する明確な境界線を持たず、内に多様性を含みつつ、それ自体容易に拡大も縮小もするような、緩やかな人間集団）は現実に存在しており、そこにはやはり何らかの、文化的なものを主とする（もちろん遺伝的なものも幾分か含まれる）ソフトなアイデンティティ（明確な輪郭線を持たず、内に多様性を含みつつ、それ自体容易に変容するような、ソフトなアイデンティティ）が、現実に存在するであろう。確かにかつてオリエンタリストが他者に対して抱いた、そして現在ナショナリストが自らに対して抱く、失われ行く文化に対する愛惜の念は、多くは虚構的なものへ向けられていたし、向けられているといつてよいのだろうが、しかし緩やかな人間集団が持つソフトな文化的アイデンティティに対する同様の愛惜の念は、虚構的ではない、リアルなものに向けられていると、いつてよいのではないだろうか。確かにその際のアイデンティティを本質的とまでいうのはいささか困難であるかもしれないが、やはり

当の者たちを当の者たちであらしめているものである以上、本質的なアイデンティティ（少しくどい説明的ない方をすれば、ソフトな仕方では本質的なアイデンティティ）と呼んでおいてよいだろう³。（そもそも次節で論じるような、人間一般の本質とされているものでさえ、人間以外の存在者に一切見られないものはないといえる——例えば言語や理性という、一般に人間にとって最も本質的とされるものでさえ、とりわけ近年の研究にしたがうならば、人間以外の動物にもある程度備わっていることを認めざるをえない——し、個人間の差異は決して小さなものではないし、またせいぜいこの1万年くらいほぼ変わらずに持続しているにすぎず、決して永遠不変のものではないのである。もちろん人間一般の本質が比較的ハードなものであることは確かであるが、あくまで比較的ハードであるというにすぎないのである。）

だがそのようなソフトな本質的なアイデンティティは、やはり更新のペースが速く、いわば絶えず失われつつあるものである。そうであるならば、その際我々は、オリエンタリズムやナショナリズムといった偏見や恣意を離れて、それが失われることに対して反発するような何かを、そもそも持ちうるのであろうか。おそらく、もし持ちうるのであれば、それは単なる古い物好きの個人的趣味に基づく感傷によるか、あるいは学術的見地に基づく文化遺産保護の訴えによるか、どちらかしかないであろう。そしておそらく、そのつどの必要や要求に応じて、人間集団に独自のものが変化して行くことは、むしろ健全なことであり——その際もちろん、暴力的にそれを変化させることは決して肯定されるべきではないが——、変化によっていわばそのつど失われて行くことの方が、擁護されるべきであるように思われる。例えば何らかの病気の治療に関して、旧来の医術や医薬品より外来の医術や医薬品の方が明らかに有効であるならば、前者より後者を利用する方がやはり健全であろう。あるいは旧来、男女間等において差別があるならば——それはナショナリズムによって恣意的に作り出されたと

³ 人間集団およびそのアイデンティティの虚構性やリアリティといった問題については、もちろん多くの文献があるが、例えば次のものを参照せよ。小熊英二『単一民族神話の起源 〈日本人〉の自画像の系譜』、新曜社、1995年；酒井直樹『死産される日本語・日本人 「日本」の歴史—地政的配置』、新曜社、1996年；太田好信『トランスポジションの思想 文化人類学の再想像』、世界思想社、1998年；小田亮『日常的抵抗論』（電子版：<http://www2.ttcn.ne.jp/~oda.makoto/mokuji.12.10ed.htm>）。

いう場合も多いだろうが——、それは改められるのがやはり健全であろう。

以上において述べてきたように、我々が抱く、人間集団の本質的アイデンティティの「失われ」に対する反発は、オリエンタリズムやナショナリズムといった偏見や恣意に基づいているか、あるいは個人的趣味に基づいているか、あるいは学術的見地に基づいているかの、いずれかである。偏見や恣意に基づく反発は、そもそも虚構のものに向けられているため、正当なものではないだろう。残る二つのものに基づく反発は、とりわけ個人的趣味に基づく反発は、それほど重みを持つものではないだろう。したがって我々は、そのつどの必要や要求に応じたそのつどの「失われ」を基本的に受け入れつつ、その上で、もし学術的見地に基づいて保護する価値のあるものがあれば、それをなるべく保護して行くようにするというのが、望ましい方途であるように思われる⁴。

3. 人間一般（普遍）

試みに、かつて社会主義諸国において部分的にであれ実践されていた制度を思い浮かべてみることにしよう。それはすなわち、私有財産制度を廃止して、あらゆる財産（生活手段）を共有化することによって、誰も他人の財産を盗むことがなくなり、財産という価値を保護することができるという制度や、ある

⁴ 本文中では自然的な（ないしは擬似自然的な）人間集団しか論じていないが、もちろん人工的な人間集団も存在するのであり、これについても若干考察をしておきたいと思う。それは例えば、国家や学校のような制度上の結びつきによる集団や、あるいは政治団体やNGOのような理念上の結びつきによる集団である——もちろん他のタイプの集団もあるだろうが、考えられる限りのあらゆるタイプの集団を列挙することは煩瑣にすぎるだろうし、またそれをする必要もないと思われるため、ここでは代表的と思われる二つのタイプの集団を挙げるにとどめておく——。このような人間集団において本質的なアイデンティティといえるものは、まさにその制度や理念そのものや、それに付随する様々な業務であろう——これらは、自然的な人間集団における本質的なアイデンティティとは違って、相当ハードなものであろう——。そしてもしそれらが失われるようなことがあれば、多くの場合、その人間集団そのものがそもそも存立しえなくなるか、あるいは実生活上の不利益が生じることになるので、多くの人はその「失われ」に対して反発するであろう。そしてその反発の理由は確かに重いものなので、それらが失われることがないようにするべきだということになるであろう——もちろん必要な限りで改変して行くことはよいであろうが——。

いは家族制度を廃止することによって、子供の教育を平等に行うことができ、また血縁に対するひいきもなくなって、社会的平等を実現することができるという制度等である。そのような制度のもとでは、人々は、人間である限り自然に持っている、「自分だけのもの」への愛着や家族愛を、抑圧されることになる。だが我々は、このような抑圧に耐えられるのであろうか。確かに財産や平等は人類普遍の価値として極めて重視されるべきものではあるだろうが、そのために、例えば「自分だけのもの」への愛着や家族愛を抑圧することは、やはり受け入れられないのではないだろうか。我々にとって、「自分だけのもの」への愛着や家族愛は、やはり人間である限り失うことのできない、本質的なものなのではないだろうか。いわば（少し次元は異なるであろうが）アンティゴネーがいう、「書き記されてはいなくても揺ぎない神さま方がお定めのだ掟」、「いつでも、いつまでも、生きてるもので、いつできたのか知ってる人さえ」ない神のだ掟のように⁵。このように我々にはどうしても、たとえ善の実現のためであっても、人間である限り失うことのできないものがあると、いつてよいだろうと思われる。

だがこれに対しては、次のような反論および提言がなされうるであろう。すなわち、我々がまだ未熟で愚かだから、そうするのが善いと分かっているのに、下らない感傷に流されてそうすることができないのだ、だが我々は近い内に、未熟で愚かな状態を克服する進化の力を、自らの手中に収めることができるだろう、そして何が善いのかは分かっているのだから、その善いことがちゃんと実行されるように、人間一般の本質自体を改造し、かくして善の実現を図るべきであると。確かに我々はそう遠くない未来に、そうしたことを可能にする強大な力を手にし、自らの本質を意のままにできるようになるであろう。だが問題はやはり、我々がはたしてそれを望むのかどうかである。例えばアレントは、人間はこれまで外的自然の制約（人間の外的条件）から逃れようとしてきたが、近年では内的自然の制約（人間の内的条件）からも逃れようとしているとし、次のように述べている。

⁵ 『ギリシア悲劇Ⅱ ソポクレス』筑摩書房、1986年、172-173ページ。

「与えられたままの人間存在とは、世俗的ないい方をすれば、どこからかただでもらった贈物のようなものであるが、科学者が百年もしない内に作り出してみせるといっている未来人は、この与えられたままの人間存在に対する反抗に取りつかれているように思われる。科学者はその与えられたままの人間存在を、自分自身で作ったものといわば交換しようと望んでいるのである。現在我々の力で地上のあらゆる有機的生命を破壊しうることが疑いえないのと同じように、我々の力でそのような交換を成し遂げうこともまた疑いえないであろう。問題はただ、我々が新たな科学的・技術的知識をこの方向に用いることを望むかどうかということである」⁶。

我々はそう遠くない未来に、「与えられたままの人間存在」、すなわち与えられたままの人間一般の本質を捨て去り、それを別のものと交換することができるようになるであろうが、はたしてそのことを望むのであろうか。ある可能的な未来世界像——もちろん相当に極端なものではあるが——を予想してみよう⁷。我々は例えば、あらゆる人の身体の安全を保護するために、あらゆる人の遺伝子や脳を操作して、あらゆる人から攻撃性を失わせることができるようになるかもしれない。あるいは家族制度を廃止して完全な社会的平等を実現するために（あわせて性犯罪を根絶するために）、あらゆる人の遺伝子や脳を操作して、あらゆる人から性欲および恋愛感情を失わせることができるようになるかもしれない。ちなみにその際、人類存続のために必要な生殖は、すべて体外受精で行われるようになるであろう——そうすればまた人口爆発の危機は去り、地球環境と調和して行けるだけの人口レベルを維持することもできるようになるであろう——。はたして我々はこのような事態を受け入れることができるで

⁶ Cf. Hannah Arendt, *The Human Condition*, The University of Chicago Press, 1958, pp.2-3.

⁷ 以下に論じるような議論については、例えば次のものを参照せよ。Lee. M. Silver, *Remaking Eden: Cloning and Beyond in a Brave New World*, Avon Books, 1997; Leon R. Kass, *Life, Liberty and the Defense of Dignity: The Challenge for Bioethics*, Encounter Books, 2002; Francis Fukuyama, *Our Posthuman Future: Consequences of the Biotechnology Revolution*, Picador, 2003; President's Council on Bioethics, *Beyond Therapy: Biotechnology and the Pursuit of Happiness*, Dana Press, 2003. またハクスリーの小説『すばらしい新世界』(Aldous Huxley, *Brave New World*) と、宮崎駿の漫画『風の谷のナウシカ』も、大いに参考になるであろう。

あろうか。もし実際に我々の本質そのものが、上記の例のように変化させられてしまったならば、我々は自分たちの本質が抑圧されていると感じることすらないであろう。そして実際に社会は、犯罪のない平和な社会となっているであろう。だが本当にそれでよいのであろうか。確かに我々は、身体や平等といった価値を何としても守りたいし、それに対する侵害を許しがたいと考える。だがそれを守るために人間本質そのものを変化させることが、本当によいことなのであろうか。このような問いに対して、多くの人は「否」と答えるであろう。例えばスウィフトの小説『ガリヴァー旅行記』(Jonathan Swift, *Gulliver's Travels*) 第4編に登場するフイヌムを、人間本質の理想と考えるのでない限りは。我々人間にはやはり、善を実現するためだから捨て去るようにといわれても、そしてそれが善の実現にとって確かに障害となりうることをちゃんと分かっている、どうしても捨て去ることのできないものがある。それは、それを失うことが人間であることそのことを失ってしまうと思われるからであろう。それが人間としての我々にとって本質的で欠くべからざるものであると考えているからであろう。したがって我々は、それが失われてしまうことに対して、強く反発せざるをえないのである。我々が人間であり続けようとする限りは。

それでは人間一般の本質の「失われ」に対する我々の反発は、いったい何に基づいているのであろうか。おそらく全くもって情緒的なものに基づいているであろうと思われる。そうすると、それに基づいて生じてくる反発は、それほど大した根拠がないということになるのであろうか。そしてやはり単なる情緒に基づいているにすぎない以上、そのような反発は軽くあしらわれても仕方がないということになるのであろうか。だが我々には、それはとても軽くあしらえるようなものであるとは思えない。むしろ相当な重みのあるものであるように思える。ではそれはなぜなのか。

例えばヨナスやドゥウォーキン⁸は、生命それ自体に、自らの現実存在の保持という目的があるとし、したがってそこに価値を認め、それを配慮すべきであるとしている⁸。このようないわゆる目的論的生命観を現代において擁護するこ

⁸ Cf. Hans Jonas, *Das Prinzip Verantwortung: Versuch einer Ethik für die technologische Zivilisation*, Suhrkamp, 1989; Ronald M. Dworkin, *Life's Dominion: An Argument about Abortion, Euthanasia, and Individual Freedom*, Alfred a Knopf, 1993.

とは容易ではないかもしれないが、しかし実際誰も、生命を持ったものが生存への傾向を必ず持っていることを、否定することはできないであろう。つまり生命それ自体は、自らの現実存在の保持をある意味で（おそらく意志的志向対象として措定されたものとは別の意味で）目的としつつ存在しているといつてよいであろう。そしてこれと同じことが、生命それ自体の本質に関してもいえるように思われる。つまり、例えばヨナスはそう考えているのだが、生命それ自体が自らの本質の保持を目的としつつ存在していると⁹。確かに生命それ自体には、同じもの（少なくとも似たもの）を再生産するという傾向があるだろうが、この傾向は、自らの本質の保持への傾向として捉えられうるのではないだろうか。そしてもしそうであるならば、我々が抱く、人間一般の本質の「失われ」に対する反発は、確かに差し当たっては情緒的なものに基づいているのだが、さらに根本的には、生命それ自体が持つ、自らの本質の保持への傾向から、来ていると考えられるのではないだろうか。つまり生命それ自体における反発が基になって、とても軽くあしらうことができない、重くて強い情緒が我々の中に生じていると、考えられるのではないだろうか。

だがもちろん、たとえそう考えられるとしても、生命それ自体が配慮の対象として認められない限りは、生命それ自体が持つ、自らの本質の保持への傾向にしたがわなければならないという責務が、生じることはない。そして生命それ自体を配慮の対象として認めるといことは、やはり意志的志向対象としての目的の措定がそこに認められない限りは、困難であろう。そして意志的志向対象としての目的の措定を生命それ自体に認めることは、事実上困難である。だが、たとえ生命それ自体が配慮の対象として認められないにせよ、おそらく実際に多くの人が人間一般の本質の「失われ」に対して強い情緒的反発を覚えることは確かであろう。そうであるならば、少なくとも民主主義が尊重される限りにおいては、人間一般の本質の改変に関しては、広範かつ慎重な議論を絶えず行って行かなければならないということになろう。そしてそうした議論を

⁹ 生命それ自体の本質の保持といつても、それは必ずしも変化に対する拒絶を意味するわけではない。そもそも生命それ自体は、絶えず変化し続ける（といつても、一個人の時間感覚からすれば、たいていの場合は悠久の時間をかけて変化し続ける）ものだからである。したがって無理やり変化させることに劣らず、不変化・固定化を強要することもまた、生命それ自体の本質に対する侵襲を意味しうるであろう。

通じて、人間一般の本質に関して何を失うことができ、またできないのかを決めて行かなければならないであろう。そしてその上で、失うことができないとされたものを失わせる恐れのある何らかの技術等については、人間一般の現実存在を失わせる恐れのある大量破壊兵器を廃絶すべき、少なくとも規制するべきであると同様に、やはり少なくとも規制をしていかなければならないであろう。

おわりに

以上において我々は、個的人間、人間集団、および人間一般という三つの次元における人間の本質の「失われ」に対する反発を論じてきた。それら三つの内で最も大きな問題になるのが、人間一般の本質の「失われ」であったといえよう。確かに3節で述べたような未来世界像は、相当極端なものではあるだろうが、これまでも科学技術力の進歩がほとんど不可能と思えることをいくつも実現させてきたことを考慮すれば、やはり単なる空想として片づけることはできないだろうし、むしろおそらくそう遠くない未来に実現されうると考えてよいだろう。そしていわゆる予防原則のようなものを働かせて、そんなことはありえないと考えるのではなく、そう遠くない未来に実現されうると考えて、まさに今、熟慮、検討、議論、対策をなすべきであろう。我々はあくまで人間であり続けようとするのか、それとも何か新たな種に変わろうとするのか。考えるべきときは、まさに今なのである。

(みたに たつひこ／三重中京大学)